

講義概要

科目名： 日本社会論演習 II
担当教授： 三和 良一
対象： 修士課程 3学期（18）期生

1. 科目のねらい：

日本社会の特性は、いろいろな面からとらえることができる。この講義では、原始時代から現代に至る日本の経済の発展の歴史を概観しながら、資源・産業（農業・鉱業・工業・サービス業）・経済活動（生産・流通・分配）・国際関係（貿易・為替）・経済政策（財政・金融）・経済主体（企業家・労働者）など経済の面から、日本社会の特性を明らかにすることをねらいとする。

2. 講義内容：

日本の前近代社会

旧石器時代から戦国時代までの日本社会はどのような特徴を示しているのか。大陸文化の移入を出発点としながら、日本的独自性はどのように形成されてきたのか。現代日本社会の奥深くに潜む原日本的基層は、どのようなものなのか。

江戸時代の日本社会

近代日本の出発点となる江戸時代の社会はどのような姿であったのか。「近代日本社会の封建性」と呼ばれる特性は、どのように形成されてきたのか。

明治時代の日本社会

日本の近代化はどのように進められてきたのか。西欧からの新しいものの導入、江戸時代からの古いものの継承の実像を解明する。

大正・昭和前期の日本社会

近代日本の「くにのかたち」が確立した時期の社会は、どのような特徴を持っていたのか。最後の帝国主義国と呼ばれる日本の「対外侵略性」の実態はなんであったのか。

昭和後期の日本社会

敗戦国日本は、連合国占領下にどのような社会構造的改革を進めたのか。高度経済成長を実現した日本の力の源泉はなんであったのか。

日本社会の現在

成熟した経済社会となった日本社会は、いま、どのような問題点をかかえているのか。

3. 使用テキスト： 三和良一『[概説日本経済史 近現代](#)』（第2版）2002年東京大学出版会

4. 参考必読文献： 網野善彦『日本社会の歴史』上・中 1997年 岩波新書

北京日本学研究中心

日本社会論演習

2003年8月～12月に北京日本学研究中心で行われた授業のレジュメ。

シラバス NO.1	1. 日本の前近代社会	日本人の起源
NO.2	1. 日本の前近代社会	古代社会
NO.3	1. 日本の前近代社会	中世社会
NO.4	2. 江戸時代の日本社会	経済の担い手達
NO.5	2. 江戸時代の日本社会	再生産の仕組み
NO.6	2. 江戸時代の日本社会	鎖国から開国へ
NO.7	3. 明治時代の日本社会	経済の新しい担い手達
NO.8	3. 明治時代の日本社会	近代産業の移植
NO.9	4. 大正・昭和前期の日本社会	近代の戦争
NO.10	4. 大正・昭和前期の日本社会	20世紀資本主義へー 井上財政と高橋財政
NO.11	4. 大正・昭和前期の日本社会	15年戦争の帰結
NO.12	5. 昭和後期の日本社会	経済復興から平成不況まで
NO.13	6. 日本社会の現在	日本人は幸せか？
NO.14	7. まとめ	グローバリズムは人類に幸福をもたらすか？

1 日本の前近代社会 日本人の起源

1. 人類の系統図

- 1.1 ヒトとは?
- 1.2 猿人・旧人・新人

2. 新人の拡大

- 2.1 新人の起源
- 2.2 アフリカからの旅路

3. 遺伝子から見る人種

- 3.1 アフリカ人からの分岐
- 3.2 3種類の日本人
アイヌ・琉球人・本土日本人

4. 中国大陸からの旅路

- 4.1 第1の旅 - 縄文人
- 4.2 第2の旅 - 弥生人

1 日本の前近代社会 古代社会

1. 弥生人の社会

- 1.1 農耕の発達
- 1.2 階級の萌芽
- 1.3 アジア的共同体社会
 - 吉野ケ里遺跡 2世紀
 - 邪馬台国 3世紀

2. 古墳時代の社会

- 2.1 鉄製農具の普及
- 2.2 古墳の構築 4世紀
 - 前方後円墳
- 2.3 大和(ヤマト)政権
 - 三角縁神獣鏡
 - 大山古墳(仁徳陵) 全長 480m 高さ 33m 5世紀
 - cf. クフ王ピラミッド 底辺 230m 高さ 137m
- 2.4 倭の五王 宋への使節派遣 西暦 478 年で中断 「宋書」

3. 律令制の社会

- 3.1 大王(オホキミ)の時代
 - ワカタケル王(雄略) 478 年 宋に上表した倭王 武
 - オホド王(継体) 6世紀初 ワカタケル王とは別の血統
 - 女王推古 厩戸王子(聖徳太子) = 蘇我馬子
 - 6世紀末~7世紀初 遣隋使の派遣
 - 憲法十七条
- 3.2 大化改新
 - 中大兄のクーデター 西暦 645 年
 - 白村江の敗戦 唐・新羅連合軍との戦争 663 年
 - 天智、庚午年籍をつくる 670 年
- 3.3 天皇の時代
 - 壬申の乱 672 年
 - 浄御原令 689 年 日本・天皇の名称
 - 持統天皇 690 年
 - 大宝律令 701 年
- 3.4 班田収授制度
 - 公地公民制
 - 租・調・庸

4. 荘園制の社会へ

- 4.1 奈良時代
 - 平城京へ遷都 710 年
- 4.2 三世一身法(723年)と墾田永年私財法(743年)
 - 班田収授の停止 10世紀

1 日本の前近代社会 中世社会

1. 荘園時代の社会

- 1.1 荘園の形成
 - 三世一身法（723年）と墾田永年私財法（743年）
 - 班田収授の停止 10世紀
 - 開墾地系荘園と寄進地系荘園
- 1.2 貴族階級の生活
- 1.3 荘園の生活
 - 本家・領家 - 荘官
 - 名田（みょうでん）経営
 - 名主（みょうしゅ） 下人（げにん）
 - 家父長制的奴隷制か家父長制的農奴制か

2. 鎌倉時代の社会

- 2.1 兵（つわもの）の台頭
 - 惣領 - 家子 - 郎党
- 2.2 源氏と平家
- 2.3 鎌倉幕府 1192年
 - 頼朝、守護・地頭の任免権獲得 1185年、 征夷大將軍 1192年
 - 北條政権 1219年 実朝暗殺後
- 2.4 元寇 1274・1281年

3. 室町時代の社会

- 3.1 室町幕府
 - 足利尊氏 征夷大將軍 1338年
 - 半済（はんぜい）法
 - 下地中分（したじちゅうぶん）
- 3.2 南北朝 1336~1392年
 - 吉野 = 南朝、京都 = 北朝
 - 守護大名
 - 荘園領主権の衰退
- 3.3 応仁の乱 1467-77年
 - 細川 = 東軍 vs 山名 = 西軍
- 3.4 戦国時代へ
 - 戦国大名

2 江戸時代の日本社会 経済の担い手達

1 戦国時代から江戸時代へ

- 1.1 戦国大名
下克上(げこくじょう)
- 1.2 鉄砲伝来
- 1.3 織田信長と豊臣秀吉
- 1.4 徳川家康

2 農民の生活

- 2.1 鉄器と木綿
- 2.2 大開墾時代
赤米
- 2.3 村の暮らし
共同体
- 2.4 年貢

3 武士の生活

- 3.1 武士階級
武士道
- 3.2 将軍と大名
知行地の授与・参勤交代
- 3.3 大名と家臣
知行取りと禄米取り
- 3.4 武士の暮らし
都市の消費者

4 町人の生活

- 4.1 三都
江戸・大坂・京都
- 4.2 商人
都市の商人と地方の商人
両替商
- 4.3 手工業者
社会的分業の発達
- 4.4 雑業者
宗教家 神官・僧侶
教育家 寺子屋
出版業 かわら版、書籍、浮世絵
貸家業・運輸通信業・清掃業

2 江戸時代の日本社会 再生産の仕組み

1 領主の経済

1.1 領主の収入

本途物成（ほんどもものなり） 米・麦、一部貨幣
小物成（こものなり） 農産物、水産物、林産物、手工業品
労役（ろうえき） 土木建築、運搬

1.2 領主の消費経済

蔵物（くらもの）の売却 大坂・江戸の蔵屋敷米を、蔵元・札差が仲介
納屋物（なやもの）の販売 城下町で禄米を販売
武具・消費財の購入

1.3 領主経済は単純再生産

拡大再生産の条件 余剰 貯蓄 投資
新田開発に投資すれば拡大再生産
現実には、余剰 = 年貢 大部分は消費 投資がなければ、単純再生産

2 農民の経済

2.1 農民の生産活動

生活必要分 = 家族の消費分 + 翌年の生産に必要な生産財（種子、肥料、農具）

自給品 肥料： 堆肥、厩肥、尿尿、刈藪き
農具： 竹箆、かます、木製農具
購入品 肥料： 植物油粕、魚肥（干鰯、鯨粕、胴鯨）
農薬： 鯨油
農具： 鉄製農具

年貢分 = 余剰分

2.2 農民の消費生活

自給自足 衣： 麻、木綿
食： 雑穀、野菜
住： むしろ、薪、家具、建物修理
購入商品 衣： 古着
食： 塩
住： 鉄製器具

2.3 農民の経済も単純再生産

一般農民は、余剰の取得が困難 貯蓄が困難 投資が困難
農村余剰は寄生地主が取得
地主余剰は、土地取得に向かうが、農業投資には向かわない

3 江戸はリサイクル社会

3.1 江戸のインフラ

上水道
尿尿処理
塵芥処理

3.2 リサイクル・システム

回収業 紙、蠟、灰、ぼろ布

2 江戸時代の日本社会 鎖国から開国へ

1 鎖国の意味

- 1.1 日本人の海外渡航禁止
- 1.2 外国人の来日制限
朝鮮通信使
- 1.3 制限された貿易
長崎 出島のオランダ商館
唐人屋敷
定高仕法 (1685年) 中国船 銀 6000貫 オランダ船 銀 3000貫
琉球経由の密貿易

2 江戸社会の変容

- 2.1 農民層の分解
年貢圧力 + 商品経済の篩い分け 貧富の格差
土地の質入れと質流れ
田畑永代売買禁令・分地制限令にもかかわらず土地流動化
土地集積地主の拡大
地子 (借地料) 農村余剰の 100% を年貢として取ることは不可能になる
農村の末端統治者として地主を活用
地子の疑似年貢化
- 2.2 農民の抵抗
逃散
百姓一揆
代表越訴型 総百姓一揆型 世直し一揆型
- 2.3 領主財政の悪化
町人からの借金の累積
幕政改革・藩政改革

3 開港の衝撃

- 3.1 開国と開港
安政条約の性格
自由貿易原則 19世紀資本主義の圧力
不平等条約
協定関税制
領事裁判権
- 3.2 貿易の開始
輸出: 生糸・茶
輸入: 綿製品・鉄・灯油・軍艦
- 3.3 通貨体系の変化
金: 銀 日本 1:5
世界 1:15
貨幣改鑄

3 明治時代の日本社会 経済の新しい担い手達

1 明治維新の政治過程

- 1.1 尊皇攘夷から尊皇倒幕へ
- 1.2 戊辰戦争(1868-69年)
- 1.3 版籍奉還(1869年)から廃藩置県(1871年)へ
- 1.4 西南戦争(1877年)
- 1.5 自由民権運動(1870年代後半から1880年代)
- 1.6 大日本帝国憲法の発布(1889年)

2 明治維新の経済史的意義

- 2.1 身分制の解体 四民平等
- 2.2 近代的土地所有の確立
地租改正(1873年地租改正条例公布)
秩禄処分(1876年金禄公債証書発行条例)
- 2.3 近代的経済制度の導入
経済活動の自由化
契約の自由
新貨条例(1871年)
銀行制度(1876年国立銀行条例)
- 2.4 近代産業の移植
殖産興業政策

3 明治の農民

- 3.1 地主
寄生地主
地主手作(豪農)
- 3.2 小作農
高率小作料の負担
- 3.3 老農
勸農政策 品評会

4 明治の労働者

- 4.1 女子労働者
「女工哀史」
- 4.2 炭鉱夫

5 明治の資本家

- 5.1 政商から財閥へ 両替商の運命
- 5.2 中小資本家

6 明治の官僚

- 6.1 藩閥
- 6.2 近代官僚

文官任用令改正・文官分限令公布(1899年)

3 明治時代の日本社会 近代産業の移植

1 資本主義化の前提条件

- 1.1 本源的（原始的）蓄積
 - 資金 = 資本の蓄積
 - 商人による資金蓄積
 - 労働力の蓄積
 - 農民層の分解
- 1.2 機械の採用
 - 技術の輸入
 - 技術の習得
- 1.3 インフラストラクチャの整備
 - 貨幣金融制度、保険制度、証券・商品取引所
 - 交通・運輸（鉄道・海運）・道路・港湾
 - 通信（郵便・電信・電話）
 - 電力・上下水道

2 後発国の資本主義化

- 2.1 先進諸国の圧力
- 2.2 後発の有利
- 2.3 資本主義確立の指標
 - 繊維産業の近代工業化
 - 輸出産業の近代化
 - エネルギー産業の近代化
 - 軍需工業の近代化

3 繊維産業・輸出産業の近代工業化

- 3.1 綿紡績業
- 3.2 製糸業
- 3.3 織布業

4 エネルギー産業の近代化

- 4.1 石炭鉱業
- 4.2 電力業

5 重工業の近代化

- 5.1 軍需産業の発達
- 5.2 鉄鋼業の近代化
- 5.3 造船業の近代化

6 日本資本主義の特質

- 6.1 産業構造
 - 農業の比重大 軽工業中心型 官営工場の比重大
- 6.2 市場構造
 - 輸出市場の比重大 アジア市場の比重大
- 6.3 資本構造
 - 財閥の支配力大

3 大正・昭和前期の日本社会 近代の戦争

1. 日清戦争

- 1.1 朝鮮半島をめぐる対立
壬午軍乱 1882 年
王妃の一族閔(びん)氏 = 親清派、国王の生父大院君派 = 親日派
- 1.2 開戦
1894 年 7 月朝鮮王宮攻撃、豊島沖で交戦 8 月宣戦布告 9 月黄海海戦
1895 年 3 月遼東半島制圧
- 1.3 講和会議
1895 年 4 月日清講和条約調印
清国による朝鮮独立の承認
遼東半島・台湾・ぼう湖島の割譲
賠償金 2 億両(約 3 億円)支払い 遼東半島報酬金 3000 万両(4500 万円)
沙市・重慶・蘇州・杭州の開市・開港 通商特権 工場建設など
- 1.4 戦後経営
 - a 軍備拡張 陸軍：平時 7 万戦時 21 万 15 万・60 万、海軍：6 万ト 25 万ト
 - b 産業振興 八幡製鉄所設立 海運・造船奨励 電信・電話の拡張 鉄道の改
 - c 金本位制 1896 年松方内閣 金本位制採用決定 物価安定 輸入価格安定
1897 年 3 月貨幣法公布(10 月施行)1 円金 2 分(0.75g) 1871 年 4 分
 - d 特殊銀行 日本勧業銀行・各府県に農工銀行・北海道拓殖銀行・日本興業銀行
 - e 台湾経営 1895 年 5 月日本軍上陸 5 か月で抗日運動鎮圧 地租改正事業
農民層の分解

2. 日露戦争

- 2.1 開戦から講和へ 1904 年 2 月 旅順口奇襲(8 日) 宣戦布告(10 日) 1905 年 1 月 旅順占領 5 月 日本海海戦 8 月 ポーツマス講和会議 9 月 日露講和条約 韓国を日本の勢力範囲として承認 満州の清国への返還 遼東半島ロシア租借地・東清鉄道ハルビン支線の権利継承 樺太南半分の割譲
- 2.2 戦後経営
 - a 軍備拡張 陸軍 平時 15 万人戦時 60 万人 平時 25 万人戦時 200 万
海軍 戦艦 8 隻・装甲巡洋艦 8 隻の 8・8 艦隊 25 万ト 58 万ト
 - b 産業振興 鉄道国有化 八幡製鉄所拡張 電話事業拡張 治水事業
 - c 朝鮮経営 1906 年韓国統監府設置 1910 年韓国合併 1911 年朝鮮銀行法公布
 - d 満州経営 1906 年南満州鉄道設立 鉞山(撫順)・製鉄(鞍山) 経営

3. 第 1 次世界大戦

- 3.1 日本参戦 1914 年 7 月第 1 次世界大戦勃発 8 月 23 日日本宣戦布告
1917 年 11 月ロシア社会主義革命
1918 年 10 月オーストリア、ドイツ革命 11 月ドイツ降伏
- 3.2 大戦ブーム
開戦直後 物資輸入途絶・生糸輸出停滞予測で一時不況が深刻化
 - a 海運業活況 若松・シンガポール間不定期船石炭運賃 1914.7(100) '18.7(844)
船舶保有量 1913 年 153 万総トン 1919 年 287 万総トン 世界第 3 位
 - b 造船業活況 中型新造船 1 重量ト 1915 年末 160 円(100) 18.6 850 円(530)
建造量 1913 年 5.5 万総トン 1919 年 63.6 万総トン ストック・ポート
 - c 輸出市場拡大
連合国への軍需物資(軍需品・食料品) 需要
アジア市場 交戦国輸出減退で空白地帯 戦略物資(錫生ゴム) 輸出で活況
アメリカ市場 大戦景気で生糸需要拡大 海運市場
 - d 生産拡大 1913 年 19 年 銑鉄 2.5 倍 粗鋼 2.1 倍 綿布 1.8 倍 生糸 1.7 倍

- 企業利潤増 払込資本金利益率 1914 上 16.4% 18 下 46.6%
- 3.3 中国進出 1915 年対華 21 カ条要求 最後通牒で 13 カ条成立
1917~18 年 西原借款
- 3.4 休戦と反動恐慌
- a 戦後景気
1918 年 11 月 ドイツ降伏 一時景気後退
1919 年夏 戦後ブーム アメリカの好景気持続 中国輸出好調
投機の発生 綿糸布・生糸・米、株式、土地
- b 1920 年恐慌
20 年 3 月東京株式市場大暴落 東株価格 3 月 549 円 9 月 100.5 円
商品市場暴落 綿糸 3 月 649 円 10 月 221 円 生糸 1 月 4360 円 7 月 1100 円
銀行取付 20 年 4~7 月 169 行 休業 21 行 20 年 6 月欧米反動恐慌 貿易商破綻
救済融資 日本銀行、日本興業銀行などによる 合計 2 億 5500 万円
低生産性企業・不良企業の整理不徹底

4 戦争の歴史的意味

- 4.1 日清戦争
非帝国主義国の帝国主義的实践
「眠れる獅子」に対する勝利 「アジアの盟主」意識の台頭
「3 国干渉」 「臥薪嘗胆」、国力増強 = 帝国主義への意思統一
- 4.2 日露戦争
後発帝国主義国間の戦争
「最大の陸軍国」に対する勝利 「アジアの盟主」意識の確定
帝国主義国としての実体の形成
- 4.3 第 1 次世界大戦
帝国主義戦争への辺境からの参加
「アジアの盟主」の実践 = 中国進出
資本主義の新しい段階へ

3 大正・昭和前期の日本社会

20 世紀資本主義へ

1 資本主義の発展段階

- 1.1 形成期 重商主義の時代
商人資本と産業資本
原始的蓄積
- 1.2 確立期 自由主義の時代
産業革命
自由放任
- 1.3 変質期 帝国主義の時代
独占の形成
帝国主義的政策
- 1.4 第2の変質期 20世紀資本主義の時代
社会主義革命のインパクト
福祉国家

2 20世紀資本主義の経済政策

- 2.1 階級宥和政策
経済的メリット
政治的・社会的メリット
- 2.2 資本蓄積維持政策
利潤保証
生産力保証

3 1920年代の日本経済

- 3.1 拡大した経済規模
大衆消費社会への始動
- 3.2 マクロの危機
国際収支の赤字
- 3.3 ミクロの危機
企業利潤の低下
- 3.4 階級対立の激化
労働争議・小作争議

4 井上財政

- 4.1 井上準之助
- 4.2 金解禁政策
財政緊縮
- 4.3 世界恐慌から昭和恐慌へ
1929年10月「暗黒の木曜日」
- 4.4 満州事変とイギリス金本位制停止
ドル買い

5 高橋財政

- 5.1 高橋是清
- 5.2 金輸出再禁止
円為替暴落
- 5.3 積極財政
景気回復

6 井上財政と高橋財政の評価

4 大正・昭和前期の日本社会

15 年戦争の帰結

1 満州事変から太平洋戦争へ

1.1 満州事変

1931.9.18

満州建国

1.2 日中戦争

1937.7.7

点と線

1.3 太平洋戦争

1939年7月日米通商航海条約破棄通告 40年7月航空機用ガソリン輸出禁止

9月北部仏印進駐 日独伊3国同盟調印 10月屑鉄・鉄鋼輸出禁止

41年7月南部仏印進駐 日本資産凍結 8月石油全面的輸出禁止

10月東条英機内閣 12月8日開戦

2 戦時経済

2.1 日中戦争期の経済統制

統制2法 1937年9月臨時資金調整法・輸出入品等臨時措置法

国家総動員法 1938年4月「国防目的達成ノ為・・人的及物的資源ヲ統制運用」

政府に白紙委任 本格的発動は翌39年から

物資動員計画 1938年1月 昭和13年計画作成

2.2 太平洋戦争期の統制強化

配給制度 1940.6 切符制 砂糖・マッチ、41.4 米 米穀配給通帳

統制会 鉱工業・貿易・運輸・金融に33統制会設立

軍需会社法 1943年10月公布 合計683社指定

3 戦争経済の破綻

3.1 戦争の経済学

軍需品(特殊な消費財) 生産肥大化 民需生産圧迫 再生産に必要な生

産財生産圧迫 軍需品生産に必要な生産財生産圧迫 軍需生産縮小

3.2 生産能力の縮小

兵器生産ピーク 軍艦 44.9 航空機 44.11 弾薬 44.9 海上輸送力 1941.12

4 日本経済の構造変化

4.1 産業構造

重化学工業化率(生産額比)1935年 43.5% 40年 58.9% 44年中 79%

4.2 財閥の強大化と変質 払込資本金シェア 4大財閥 1937年 10.4% 1945年 24.1%

株式公開 外部資金依存 本社統括力の相対的弱化

4.3 地主制の弱体化 農地調整法・小作料統制令・食料管理法

小作料率 1941年 50% 45年 30%

4.4 労働者の管理 労働組合自発的解散 大日本産業報国会

4.5 国民生活の劣化 実質個人消費支出 1935年 100 40年 91 44年 65

利潤率維持(35年上 16% 40年上 17%)

実質賃金抑制(35年 100 40年 70前後)

現代資本主義の限界で、日本ファシズムが国民統合の最後の切り札として機能

5 昭和後期の日本社会 経済復興から平成不況まで

1 経済復興への道

- 1.1 インフレーションの抑制
 - 需給関係の基礎的不均衡
 - 経済統制の継続 補助金支給
 - 通貨流通量の調整 1946年金融緊急措置 新円発行と預金封鎖
- 1.2 傾斜生産と傾斜金融
 - 石炭と鉄鋼の生産拡大策
 - 復興金融金庫
- 1.3 ドッジ・ライン
 - 緊縮財政
 - 単一為替レートの設定
- 1.4 朝鮮戦争と特需ブーム
 - 特需のインパクト
 - 経済活動の戦前水準への回復

2 高度経済成長とその終焉

- 2.1 高度成長の要因
 - 国際的要因 IMF・GATT体制
 - 国内的要因 技術革新 戦後経済改革 消費革命 経済政策
- 2.2 高度成長の終焉
 - ドル・ショックとオイル・ショック
- 2.3 低成長時代の優等生
 - 日本的経営
 - 日本的生産方式

3 バブルとその崩壊

- 3.1 バブルの発生
 - 過剰流動性
 - マネーゲーム
- 3.2 バブルの崩壊
 - 金融引き締め政策、地価規制政策

4 平成不況

- 4.1 バブル後遺症
 - 金融機関の弱体化
 - 企業も家計も引締め姿勢
- 4.2 グローバル・コンペティション
 - アジア諸経済の競争
- 4.3 産業空洞化
 - 工場の海外移転
- 4.4 経済政策の限界
 - 公共投資の効果減退
 - 規制緩和政策の行方

6 日本社会の現在 日本人は幸せか？

1. 幸福とは？

- 1.1 古代・中世には
人間は誰でも幸福になれる 古代中世倫理学の命題
個人の行為の適否が問題
現世は涙の谷 中世カトリック教会の教え 此岸の幸福と彼岸の幸福
- 1.2 近代になると
人間は誰でも幸福を追求する権利がある アメリカ独立宣言 日本国憲法
個人の外部の側に問題がある
- 1.3 19世紀のディレンマ
「幸福な王子」は幸福か？ Oscar Wilde (1854-1900)
『幸福論』 Carl Hilty (1833-1909)
物的欲望の充足よりも精神的満足を
- 1.4 20世紀を経験してみると
「幸福」の増大にではなく、「苦痛」の減少にしか「進歩」の基準は見いだせない
市井三郎『歴史の進歩とはなにか』(岩波新書)
積極的「幸福」と消極的「幸福」
- 1.5 過剰富裕化の時代には？
モノの豊かさとココロの貧しさ
物的欲望がアイデンティティを支える
欲望の罠
満たされることのない欲望
- 1.6 グローバリゼーションのなかで
「幸福を追求する権利」には制約はないのか？
現在の他者はライバルにすぎないのか
将来の人の幸福を犠牲にして良いのか

2. 日本人の幸福観

- 2.1 前近代では
モノへの欲望レベルは低い
富の現実態(財宝)の貧困 金製品の少なさ 土地・貨幣の供給限界性
巨富蓄積の可能性の低さ 帝国形成は困難
共同体の抑制作用
ココロの安らぎ・充足への願望は高い
自然信仰 祖先霊・地霊信仰 宗教(神道・仏教・カトリック教)
規範体系(儒教・国学) 芸術(美・わび・さび)
芸能(歌舞・音曲) 文学(詩・小説・戯曲・随筆・記録)
- 2.2 近代化のなかで
モノへの欲望の開放
商品の多様化 貨幣の増殖力の拡大
木下順二『夕鶴』
新しい欠落感、ココロの不安、それからの解放への願望
近代科学によるカミ殺し 共同体の衰弱
宗教(国家神道と教派神道、キリスト教)
規範体系(家督 天皇 国民国家)
近代思想(民権主義 自由主義 社会主義)
近代文学(自我の覚醒 ヒュ・マニズム リアリズム)
- 2.3 戦後
アメリカ文明への傾斜 モノへの欲望の肥大化
日本文化への自信喪失 ココロの価値下落

ココロの新しいよりどころ

宗教（新興宗教）

規範体系（個人主義、マイホーム主義、民主主義、人権尊重、平和主義）

思想（マルクス主義、実存主義）

趣味（スポーツ、映画、読書）

3．現代の日本人は？

3．1 個化した自己が浮遊する時代

国家からの遊離 日本人意識の喪失

社会からの遊離 連帯意識の喪失

家族からの遊離 愛の不在

3．2 モノへの過剰依存

モノによってしか確認できない自己の存在性

差別化されたモノによって担保される自己

買い物依存症 モノの購買それだけがアイデンティティ確認行為

3．3 ココロのよりどころの喪失

宗教（オーム真理教、幸福の科学）

規範体系（会社主義、共生社会）

思想（文化相対主義、現象学、構造主義）

趣味（テレビゲーム、テレビ、スポーツ、読書）

まとめ グローバリズムは人類に幸福をもたらすか？

1. 戦争と平和

- 1.1 攻撃性の歴史
 - 遺伝子レベルの特性
 - 遊牧と農耕
- 1.2 縄文人と弥生人
 - 狩猟採取社会と農耕社会
- 1.3 前近代の戦争
 - 武士の再生産構造 江戸の平和
- 1.4 近代の戦争
 - 国民戦争・帝国主義戦争・侵略戦争 全体戦争 Total War
- 1.5 戦争放棄
 - パリ不戦条約（1929年発効）国際連合憲章（1945年発効）
 - 日本国憲法（1947年施行）
- 1.6 20世紀後半の戦争
 - 東西間の戦争（直接対決・間接対決）
 - 内戦 革命戦争 種族紛争 大国の干渉

2. デモクラシーの帝国

- 2.1 アメリカン・デモクラシー
 - デモクラシーの伝統
 - 第2次大戦の性格 全体主義 VS 民主主義
 - 東西対立 プロレタリア独裁 VS 民主主義
 - 冷戦終結 ユーフォリア
- 2.2 イデオロギー国家
 - 社会主義国家 宗教国家（イスラム教国・キリスト教国・仏教国）
 - デモクラシー国家
- 2.3 アメリカとヨーロッパ
 - アメリカン・デモクラシーと社会民主主義
 - 市場原理主義と社会的市場

3. 21世紀は？

- 3.1 3極化する世界
 - アメリカ・EU・アジア
 - 取り残される地帯
- 3.2 アジアの構造
 - 基軸経済・基軸通貨・基軸国家
- 3.3 社会の安定性
 - 格差
- 3.4 資源をめぐる対立
 - 石油・天然ガス 水 食糧
- 3.5 共生を求めて
 - Live and let live 共存 Sympathy 共感 Mitleiden 共苦